



老いてなお興味津々

向井 秀樹

東邦大学医療センター大橋病院皮膚科前教授

私の恩師である北里大学名誉教授の西山茂夫先生は医局員に「君の研究は患者に役立つ？」とよく聞かれた。この言葉が臨床研究を続ける私の座右の銘にもなった。入局4年目に、中年女性の右前腕と胸部に自覚症状のない青紫色斑をみた。まったく臨床診断が付かず、病理組織学的検討をさんざん試みたが診断確定に至らなかった。図書館に通い医中誌を10年以上以上くまなく検索、ついに流産時に使用された代用血漿剤ポリビニルピロリドン（PVP）沈着症と診断でき、治療評価に役立つ血清PVP量の測定法を作製した。目の前の患者に初めて病名と治療法を提示できた。

組織学的に皮膚限局性と全身性アミロイドーシスの違いは、一般的な染色法では鑑別できない。そこで、皮膚角層における角化過程をSH基とS-S結合で蛍光識別できるN-(7-dimethylamino-4-methylcoumarin-3-yl) maleimide (DACM) 染色を用いることでその違いを明らかにした。表皮細胞由来の皮膚限局性はDACM染色陽性に比して、全身性は免疫グロブリンやアミロイドA蛋白など由来が異なり陰性となる。肝臓や直腸などの全身精査の必要性がこの染色結果から導ける。ゴールを見据えた臨床研究の醍醐味である。

1990年代、急増するアトピー性皮膚炎（AD）に対し、病変部に多量に存在する黄色ブドウ球菌（*Staphylococcus aureus* : SA）を用いた細菌療法の有用性、安全性や作用機序を報告した。製剤化に至らなかったが、AD発症にSAの関与は証明されている。また、当時AD治療の基本は適切かつ十分なステロイド外用療法とも考え、入院療法を展開し短期間で皮膚症状を改善させることができた。

AD診療ガイドライン2024に入院療法の有用性は引用されている。入院前後や外来診療での治療効果や悪化など病勢の短期バイオマーカーとして、血清LDHの有用性を報告した。血清TARC値が世に出るまで、末梢血好酸球数や血清IgE値に比してバイオマーカーとして有用な検査法であった。

最近、皮膚科学全般にわたって新しい検査法や全身療法が開発され、皮膚科全体が活性化している。目先の新しいものに飛びつく、そんな軽々しい生き方ではなく、時代が変わろうと万古不易、どっしり構え従来の検査や治療法で突き進む硬派、それも構わない。しかし、診断に苦慮する例に新しい検査法（ヘルペスや爪白癬のデルマクイック[®]キットなど）を試み、診断が確定したときには安堵感や高揚感が得られる。新しい全身療法で効果不十分だった例がバイオスイッチ後に大幅に改善したり、長期寛解が維持できた場合、さらに出口戦略として投与間隔延長やその先のバイオフィリーに移行できると満足感と達成感を覚える。これから皮膚科を支える若い医師たちにも、臨床研究をぜひとも始めてほしい。

皮膚科学の進歩に伴い、今後さらに新しい全身療法や外用療法が登場してくる。インターネット社会であり、どこにいても新しい情報は目に留まる。医師会や講演会、学会などで学ぶ機会は少なくない。新しいことにチャレンジして、自身にとって未知な不慣れな分野でも診療範囲を広げることができる。人生100年時代で私と同世代の読者も多いことと思う。老いてなお興味津々、患者ファーストで若い医師に交じってチャレンジ精神をもち続けてはどうだろうか。